

特定非営利活動法人サロン 2002

《2014年9月 月例会報告》

テレビに映らなかつたワールドカップ

宇都宮徹壺 (写真家/ノンフィクションライター)

【日 時】2014年9月26日 (金) 19:00~21:00 (軽く飲食しながら) ~1:00頃

【会 場】フットボールサロン44-2 (墨田区江東橋4-16-5 SK ビルB1)

【演 者】宇都宮徹壺 (写真家/ノンフィクションライター)

【参加者: 会員・メンバー (14名)】安藤裕一 (インターナショナル SOS/サロン2002 理事)、宇都宮徹壺 (写真家/ノンフィクションライター)、梅本嗣 (会社員)、奥崎寛 (会社員)、奥山純一 (WEB エンジニア)、春日大樹 (筑波大蹴球部)、金子正彦 (会社員)、北田典央、小池靖、佐藤一朗、茅野英一 (帝京大学)、徳田仁 ((株)セリエ)、中塚義実 (筑波大学附属高校/NPO サロン2002 理事長)、中村敬 (みどりサッカークラブ)

【参加者: 未会員 (13名)】有坂哲 (都立石神井高校サッカー部 OB)、内田裕之 (自由学園高校教諭)、石川淳一、大坪由里子 (会社員)、樋口早智子 (会社員)、高平豊明 (株式会社 J-SIC/サッカー文化フォーラム代表)、湯浅啓太 (東京理科大)、水崎由宇呂 (会社員)、羽廣太 (fcFA FOOTBALL SHOP 店舗責任者)、宮田秀徳 (会社員)、緑川貴則 (南葛 SC 運営)、田中洋介 (南葛 SC 事務局)、中村泰也 (会社員)

注) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません (ご本人の了解が得られた方のみ公開しています)

【報告書作成】春日大樹 (筑波大学人文学類4年、筑波大学蹴球部)

<目次>

自己紹介・導入 (宇都宮徹壱以下同様/p3)

本編Ⅰ 「W杯総括」 (p3)

本編Ⅱ 「盛大に送り出された日本代表」 (p4)

本編Ⅲ 「アメリカキャンプの様子」 (p4)

本編Ⅳ 「日本代表の現在地」 (p5)

本編Ⅴ 「開催国ブラジルの実態」 (p6)

本編Ⅵ 「ベロオリゾンテの悲劇」 (p6)

本編Ⅶ 「ドイツ優勝の意味」 (p7)

本編Ⅷ 「W杯の魅力とは」 (p7)

質疑応答Ⅰ 「日本代表のコンディション調整と置かれた状況」 (p8)

質疑応答Ⅱ 「アギーレジャパンで注目する選手」 (p8)

質疑応答Ⅲ 「ドイツの「バイエルン化」」 (p8)

質疑応答Ⅳ 「日本のスカウト事情」 (p9)

会場の声Ⅰ 「わたしの観たW杯～現地観戦組～」

徳田さん (株式会社セリエブラジル大会観戦ツアー企画会社として/p9)

大坪さん (ツアー参加者/p101)

石川さん (ツアー参加者/p10)

樋口さん (p10)

北田さん (サロン2002新入会員/p10)

会場の声Ⅱ 「本日の感想」

有坂さん (石神井高校OB/サッカーカフェMF/p11)

奥山さん (南米旅行の経験から/p11)

春日 (筑波大学蹴球部/p11)

おわりに「アジア杯展望」(宇都宮徹壱/p11)

自己紹介・導入 (以下、宇都宮徹彦)

「W杯の会場を観てて感じるんですけど、当然そのテレビに映らない、あるいは映さないものっていうのが結構ある」

サロン2002の出来た1997年ごろに、私はフリーランスの仕事を始めました。当時は仕事もなく、無名の存在でした。その時サロンで出会った島原裕二さんの紹介で最初の本を出すきっかけを作ってもらったり、同じくその場で出会ったスポーツナビゲーション(以下スポナビ)の広瀬一郎さんから、スポナビの仕事を立ち上げから関わらせてもらったりしていました。

この仕事を続けて行く上で、サロン2002には様々なきっかけを作ってもらっています。NPO化したサロン2002に深く関わることはできませんが、私が取材を通じて得た様々な知見を提供していければいいなと思っています。

テレビと現地では観えるものが異なっています。例えば、決勝戦で乱入してきた観客がいましたが、彼はテレビには映っていません。彼がテレビに出ることで政治的、あるいは宗教的なメッセージを発信すると、FIFAにとってはよろしくないこととなります。よって映像に映さないという対応をします。W杯の映像に映るということは、全世界の何百万の人への宣伝になってしまうため、テレビ側がシャットアウトしてしまうということです。そのため、現場にいてすべて観ていた私たちとは違いが生じてしまいます。

W杯には写真家としてでなく記者として行っていますが、カメラは常に携帯し、試合以外のところ、いわゆるテレビに映っていないところを撮ってきました。W杯が終わって時間が経ってしまっていますが、少し違った視点から話ができればいいと思います。

本編 I 「W杯総括」

「(今大会は) 移動距離とあとそれぞれの地域の気温差、湿度差、そういったいろんなものが重なり合って、本来の力を出しにくい大会であったと言えます」

日本代表が戦った会場は、第1戦がレシフェ(対コートジボワール)、第2戦が、350キロほど北上したところにあるナタール(対ギリシャ)、第3戦がクイアバ(対コロンビア)でした。またキャンプ地は、サンパウロのそばにあるイトゥでした。

ここで強調しておきたいことは、各会場間の距離です。ナタールとクイアバは2600キロ離れていて、東京を起点にすると北京は超えるが香港には届かないぐらいの距離になります。同じブラジルという国ではありますが、日本の感覚だとアジアの各地に行き行って試合をする感覚になります。

気候の変化も大きかったです。南半球のブラジルは、南に行くとも寒くなり、北に行くとも暑くなります。会場のうち、一番緯度の高かったマナウスやフォルタレーザは気温35度以上になる場合もあります。対して、南にあるクリチバ、ポルト・アレグレ、サンパウロなどは肌寒く感じることもありました。また沿岸部はスコールがよく降り、蒸し暑いが、内陸部はカーッと直射日光が当たる照りつける暑さで、湿度もそこまで高くありません。

この移動距離と気候の変化の影響で、強豪国が1次ラウンドで敗退してしまうなど、本来の力を出しにくい大会だったと思います。

本編Ⅱ 「盛大に送り出された日本代表」

「守備はかなりやばいと思っていましたが、それ以上に点が取れる日本代表を観てみたいというのがちょっとありました」

ブラジル入りするまでの日本代表のスケジュールは以下の通りです。

- 5月12日 メンバー発表、壮行会
- 21日～25日 指宿合宿
- 27日 キプロス戦（国内最終戦）
- 29日～6月6日 タンパ合宿（アメリカ、フロリダ州）
- 6月2日 ザンビア戦
- 3日 ブラジル、イトゥ入り（25日まで滞在）

代表の壮行会では歌手が来たり、総理のメッセージがあったりと非常に盛大に行われました。この華やかさに比べると、ザッケローニの最後の会見を日本でやらなかったことが今でも不満です。

埼玉スタジアムでは代表選手とスタッフがそろっての記念撮影がありました。この時、1次リーグ突破は五分五分だと思っていました。それでもザッケローニのもと、俊敏性とポゼッションを軸に作って来た日本のサッカーをしっかりとさせるかどうかというところを密かに注目していました。

キプロス戦、ザンビア戦はともに失点しますが、勝ってしまったという試合展開だったと思っています。この2試合から、守備面は不安だが、それ以上に点が取れる日本代表が観られるのではないかと楽観視していました。

本編Ⅲ 「アメリカキャンプの様子」

「本当に今回、追い込む、追い込む、そして暑い中での合宿をすることが本当によかったか、十分に検証する必要がありますね」

アメリカ遠征では、宿泊とトレーニングは近くのクリアウォーターで、試合はタンパで行う形をとっていました。クリアウォーターはその名の通り、アメリカでもっともきれいな海岸と海のある町でした。選手達はクリアウォーター内でも最高級の格付けのホテルに泊ることになっていましたが、内装は古く、冷房の温度調整は上手くいかず、岡崎が発熱するなどの問題が起きていました。

5月21日から25日までの指宿合宿では、かなり負荷の高いトレーニングを行っていたようです。その中で、酒井高德が筋肉系のアクシデントにより別メニュー調整となっていました。アメリカ合宿では長谷部が膝の問題でぎりぎりまで別メニュー調整となり、本戦に間に合うのかとひやひやしたことを覚えています。

アメリカでも日中は35度と非常に暑く、スコールが降る環境でした。ナタール、レシフェを想定して、また処熱対策が狙いだったのではと推測しますが、国内から続いて暑い中追い込んだ合宿を行うことに意味があったかについては十分検証する必要があると思います。

合宿を通して酒井高德と長谷部は別メニューということになっていました。ここで問題点として挙げられることは、日本代表のメンバーの人数です。他の代表チームはバックアップメンバーを含めた25人から30人で合宿を行っていましたが、日本代表は23人しか連れて来ていません。これは私の持論ではありますが、30人なら30人、23

人と7人ならそれでもいいので、バックアップも含めた全員をキャンプに連れて行き、コンディションの悪い選手はそこまでで帰国してもらおう処置をとるべきであると考えます。

98年フランス大会での、いわゆる「カズショック」以来、最終メンバーから漏れた選手を帰国させることが日本サッカー界のトラウマになっているように思いますが、そろそろ考えを改めるべきところに来ているのではないかと感じています。

合宿中のメディア対応は、23人が3組に分かれてローテーションを組み、それぞれが椅子に座ってテレビとペン（雑誌や新聞の取材）と一緒に取材に応じる形をとっていました。一人あたり話してくれる時間は10分くらいと比較的しっかり話を聞くことができ、また全員と3日に1回は会える計算になっていました。このシステムで、本来であれば試合前は試合に集中するためにしゃべることのない本田も報道陣の前に現れることになりました。

本編IV 「日本代表の現在位置」

「グループステージの最終戦からラウンド16のあの息詰まる試合を観ると、全然違う試合に観えてならなかった。これがW杯なんだなと思いましたし、まずはグループリーグを確実に突破できるぐらいにならないと日本はその先にはいけないと思っています」

ブラジルでの前日練習は、キックオフ時刻と近い時間帯に順番に行われました。コートジボワール戦の前日、日本は20時ぐらいから行いました。スペインなどでは22時キックオフという試合は行われているようですが、日本の選手はほとんど経験のないことでした。しかし、選手たちはそれでも「やるだけ」と答えてはいました。

加えて日本代表は、全試合前日に現地入りしていましたが、気温に慣れる時間、また蚊が非常に多いなどという現地の状況、気候に慣らす時間が十分であったか検討して欲しいと思います。可能ならばより早く会場入りすることはできなかったのかと思います。

日本代表から話は離れますが、今大会でアルジェリア代表が初めて1次リーグを突破しました。82年大会に悔しい敗退を味わってから、32年ぶりにやってきたチャンスをつかんだ形になりました。この光景をみて、1次リーグを突破するというはこういうことなのだなと感じました。同時にアギーレジャパンの目標は、まず確実に1次リーグ突破できる力をつけることだと思っています。

「色々な意味で日本が世界にチャレンジする、そのきっかけ、気付きを与えてくれた4年間だったとも思っている」

日本代表の3試合を通じて、ザックジャパンのすべてを否定することはできないと考えています。今までのことをなしにするのではなく、どれだけいいエッセンスが引き継がれていくのか注視していく必要があります。

今の日本には、ザックジャパンを全否定してリスタートしているように見えてしまいます。過去のよかった部分もアギーレさんに引き出して欲しいと思います。

本編V 「開催国ブラジルの実態」

「ブラジルって結局なんかしちゃう国なんですね。なんかしちゃうってのは、完成させるって意味ではなくてなんかしちゃうってことです。(笑)」

(サンパウロアレナの写真を見ながら) 本来なら昨年度末に終わる予定でしたが、クレーンが倒れるなどの事故もあり、大会ぎりぎりまで作業をしていました。試合の3日前まで作業をしていて、高校の学園祭の前日のような印象を受けました。本当に作業が終わるのかと FIFA も気をもんでいましたが、結局大会を実施しました。今大会はどんなことがあってもやってしまう FIFA と最後はなんとかしちゃうブラジルのコラボレーションによって成立した大会でした。

日本の第1戦は22時キックオフで、移動がとても大変であったと思います。私たちはメディアバスで移動できましたが、会場で観ていたお客さんたちは、試合後に市内に戻ったのは1時ぐらいではなかったのではないかと思います。加えてレシフェは国内でも1,2を争う治安の悪い地域でありました。日本では日曜日の10時と、とても観やすかったと思いますが、現地は本当に大変でした。

W杯がテレビで観られるようになったのは90年代に入ってからですが、ここまで現地で観る人をないがしろにした大会は珍しかったです。

「彼ら(ブラジル人)にとってサッカーは「お祭り」ではなく、「日常」なんですね。毎週末にサンパウロなのか、ボダゴフォなのか、バスコ・ダ・ガマなのか何でもいいですが、マイチームがあって、そこを応援していればオッケーなんですね」

今大会ほど国が盛り上がっていなかった大会はなかったです。ブラジル国民も冷めていて、W杯は歓迎されていなかったことが感じられました。さすがに大会が開幕してからは盛り上がりはしましたが、このような状況はいままでにはありませんでした。

彼らの感覚としては、自分の応援しているチームがあるので、わざわざW杯を呼んで盛り上がる必要がなく、インフラ整備などに必要以上にお金がかかり、公共料金が値上がりしたこともあって、反FIFAのデモも起きていました。実際現地で反FIFAのデモ隊と遭遇し、機動隊が出動する事態にもなっていました。

試合会場では、恐らくブラジルのコメディアンが、現ブラジル大統領のコスプレをしている様子が見られました。現職の大統領がパロディーの対象になっていることが、W杯へのネガティブな感情の表れであるように感じました。この秋にある大統領選挙の結果に今大会の結果は影響を与えていると思いますので、その点も注目したいですね。

本編VI 「ベロオリゾンテの悲劇」

「尋常じゃない環境の中で彼(ネイマール)は戦っていたんだなと思いました」

今大会はネイマールの大会になると言われていましたが、これほどまでに1人の選手、しかも22歳の若者に注目が集まることはなかったと思います。国民2億人が自分の名前を知っていて、テレビでも街中でも自分を目撃することができ、さらには5000万人が自分の名前入りのシャツを着ているという状況では、普通なら気がおかしくなってしまうそうです。自分が特別なスターという自覚はあるかと思いますが、尋常じゃないプレッシャーの中で戦っていた選手でした。メディア対応も非常によく、次回の大会でも観られる選手なので、これからの成長が楽しみです。

準決勝のドイツ戦は、非常に興味深い試合になりました。3点目までは、点が入るたびスタジアムのどこかで悲鳴が上がり、4,5,6点目の間は無反応、最後7点目にはドイツを称えないとやられてられないという雰囲気になりました。

た。私自身、日本以外の国のゲームを観て、ここまで悲しくなることはありませんでした。その後、アルゼンチンの決勝進出が決まると、ブラジル人はみんなドイツを応援しました。聖地マラカナンで宿敵アルゼンチンがカップを掲げるくらいなら、このままドイツに勝ってもらった方がいいといった様子でした。

試合の翌日からは黄色いユニフォームは全く見られなくなり、凄く寂しい雰囲気になりました。

本編Ⅶ 「ドイツ優勝の意味」

「もしアルゼンチンが優勝していたら、日本は多分、相当なんていうか絶望しただろう。日本にはメッシみたいな才能っていうのは恐らく現れないだろうから」

今大会のドイツの快挙は決して偶然ではないと言われています。2000年初頭の低迷期、特に1勝も出来なかったユーロ2002から、全てを見直し、付焼刃的な改革ではなく、10年以上かけて作って来たことの結果でした。メッシの様な天才の力で優勝したのではなく、こつこつ積み上げることで結果を出せることが証明されたのは、日本にとってもいいことであると思います。

日本も同じくこつこつやっていくことのできる民族だと思っています。しかし、10年先をみて改革に取り組むことは大変なことです。そのため、今大会の敗戦を4年後に活かすのではなく、10年20年後に活かすことを目標に取り組んでいくべきだと思います。

本編Ⅷ 「W杯の魅力とは」

「勝つこと大事、結果を残すこと大事ですけど、やっぱりいい試合を下相手に心からリスペクトできる、気持ちの余裕、スポーツの素晴らしさ、サッカーの楽しさをいろいろな文化の人と4年に一度共有できるのがW杯の素晴らしさだと思う」

ドイツ優勝で終わったW杯の数日後、ブラジル内のとあるレストランで食事をしていました。そこにドイツサポーターが入ってきて、大騒ぎを始めました。これを見てブラジル人が彼らに拍手を送っていました。彼らはホスト国の人間として、またサッカーを愛する人間として、心からドイツを祝福していました。結果以上にいい試合をした相手をリスペクトし拍手を送れることにW杯の素晴らしさを見たと思います。

今大会は本当にきつい大会でしたが、この景色をみて、また次の大会に向けて頑張ろうと思いました。今大会、現地に行った人も行けなかった人も、4年後に向けて心の準備をして切磋琢磨していけばいいと思います。

(本編終了)

質疑応答Ⅰ 「日本代表のコンディション調整と置かれた状況」

(質問 有坂)

大会を観ていると、日本代表ほど本来の実力を出せなかったチームはなかったと思います。その点について過去の大会を含め、どのようにお考えでしょうか？

(回答 宇都宮)

ベスト16に進んだことを成功と考えると、進めなかった大会は今回を含めて3回あります。98年大会は初出場です。経験不足のため仕方ありません。06年大会は、今大会に非常によく似ているところがあったと考えます。ジーコは選手にすべてを任せ、コンディション調整にはあまり気を使っていませんでした。結果として大会前のドイツ戦にピークが来てしまい、気温が上がった大会直前には中村をはじめとする選手たちがコンディションを崩していきましました。この経験が今大会に生かせなかったことは残念です

今大会は、加えてメンタル面がチームとして揃っていなかったことも問題でした。中田英寿が空回りした06年大会とは違い、表面上は長谷部キャプテンを中心によくまとまっていた印象を持っていました。しかし、目標設定が選手間で大きく違っていたように見えました。本田、長友、岡崎は優勝を目標としていましたが、優勝は無理だろうと思っていた選手が多かったでしょう。そのあたりの意識の乖離が相当あったのではないかと考えます。

この問題に対して、ザッケローニが上手くコントロールできなかったのかと思います。同様にマスコミも、本田の言葉だけを拾って、なんとなく優勝できるような雰囲気を作っていたことも問題ではないかと考えます。代表チームの検証だけでなく、メディア側の検証も必要だと思いますので、この点をサロンでも議論できればと思います。

(補足 梅本)

マーケティング的に分析すれば、日本企業の多くは、期待せずに勝ちあがった前回大会の反省、機会損失、から今大会では決勝トーナメントまで勝ちあがった場合を想定してのビジネスプランを考えてキャンペーンとかを用意していた企業が多くありました。“誰かが仕掛けた”というよりは、そうした個々の結果として、全体で長期間、ワールドカップでモノが売れる、儲けられるのでは、という機運で日本社会でマーケティングが出来てしまった傾向が強かったのです。企業から広告をいただくマスコミもその流れに沿い、ムードを助長する結果になりがちです。

ちなみに国際的な放映権料も日本の場合、「国民一人あたり280円を、W杯を観るためにNHKに払っていた計算」になり、これはおそらく世界最高の負担額でしょう。結果として、あうんで、日本の視聴者ニーズ優先での良い放送時間が割り当てられることになった可能性も大いにあります。

W杯で長期間消費が広がれば、企業業績にも消費効果もプラスという感覚で供給側が動いてしまったのが日本のムードだったと言えるでしょう。

質疑応答Ⅱ 「アギーレジャパンで注目する選手」

(質問 春日)

新しく始まったアギーレジャパンでは、左利きのセンターバックを置きたいなど監督のアギーレの趣味がでた人選になっていますが、その中で注目している選手がいれば教えてください。

(回答 宇都宮)

注目している選手は、今回初召集された坂井選手です。失点につながる決定的なミスをしてしまった選手に再びチャンスが与えられるかどうか注目しています。今後ザックジャパンの中心選手が呼ばれ始める中、坂井をはじめとする、アギーレしか呼ばない選手がどうなっていくかは気になることです。

以前に代表の指揮を執ったオシムも、ジェフの選手を中心に国内の若手を積極的に起用し、その後、海外組を合

流させる方法をとりました。今はその時と状況が似ており、坂井が残るかどうにかによって、アギーレがどれだけ左利きのセンターバックにこだわっているのか、自身の呼んだ選手にどこまでこだわるのか判断出来ると思います。

質疑応答Ⅲ 「ドイツの“バイエルン化”」

(質問 樋口)

ドイツは今大会、同じチームでやっている選手で固めてきましたが、この点について影響はあったのでしょうか？

(回答 宇都宮)

元も含めると、大体3分の1がバイエルンの選手でした。これは決して多い数字とは言えません。その点よりも、先に述べたとおり、育成の共通理念がこの10年でしっかりできていたことが重要です。今の代表選手はそのメソッドで育った若い選手や移民の選手が多いです。これらの下地に、グアルディオラがバイエルンに持ち込んだスペイン風のエッセンスが、サッカーを発展させる際に少し影響したかなといったぐらいに思っています。

質疑応答Ⅳ 「日本のスカウト事情」

(質問 樋口)

例えば野球のスカウトは地方まで行って選手を探しますが、サッカーはどうですか？ 埋もれた才能はいるのではないですか？

(回答 宇都宮)

埋もれていった才能は間違いなくあるでしょう。ドイツではすみずみまでネットワークが出来ていて、いい選手が掬いあげられるシステムになっていますが、日本は地理的な要因でなかなかそれは難しいです。また育成の指導に当たっているコーチに対するリスペクトが、海外と日本ではかなり異なっています。向こうのコーチにはリスペクトがあり、社会的に仕事として認められていて、指導環境はかなりいいです。しかし日本では「サッカーを教えしてくれるおにいちゃん」止まりであるように感じます。こういったコーチが日本のサッカーを強くしているというリスペクトや環境を整えていかないと、ドイツのようににはならないと思います。

(補足 中塚)

日本にも「トレセン」制度によって各地の選手を掬いあげられるシステムはあります。しかし、そこにたどり着くまでに出会うコーチの目を鍛えることは出来ていません。ドイツのように共通の目を持った指導者を育てていくことが必要であると思います。

会場の声Ⅰ 「私が観たW杯 現地観戦組」

◆徳田さん (株式会社セリエ/ブラジル大会観戦ツアー企画会社として)

今大会はとにかく費用がかかりました。ホテルは軒並み400ドル以上で、国内線の飛行機は値段がどんどんあがっていき、最終的には10万円ほどしていました。今大会はキックオフ3時間前から試合終了まで、試合のある都市の上空を飛ぶことが出来ませんでしたので、乗る飛行機の変更連絡が試合後にくるなど、大変でした。また、安く手配した飛行機のチケットが変更で高くなってしまふなどの問題もおきました。しかし、飛行機が遅れることがなかったので、その点はツアーとしてよかったです。

今回のツアー参加者は480人ぐらいで、特に日本の第1戦と第2戦を観る人が多かったです。第3戦は日本人の観客は減りましたが、コロンビア人が減らないのでチケットの値段は変わりませんでした。

また、ブラジルの敗退を受けて決勝戦のチケットが暴落するのではないかという見方もありましたが、実際は反対に値段があがりました。オフィシャルチケットを販売する会社「MATCH」の社長が、不当な値段でチケットを販売したため逮捕されてしまい、結果として試合の3日前にチケットの供給がストップしてしまいました。ここに3万人を超えるチケットを持たないアルゼンチン人がやってきて、チケットの値段がどんどんあがり、最終的には観えるか観えないかの席で6000ドル以上の値段がついていました。私たちも、お金は払ったがチケットが手元にないといった状況でしたが、ここまで値段があがらずになんとか購入することができ本当によかったですね。

◆大坪さん（ツアー参加者）

今大会で一番頭に来たことは、チケットが開幕2週間前まで届かず、届いたと思ったら、ナタールのスタジアムの工事が間に合わず席を変更することになったことです。存在しない席のチケットが出回っていたようで、チケットを現地で引き換える旨を3日前にFIFAからメールで知り、実際に英語で手続きしてなんとか引き換えてもらいました。前回の南アフリカはしっかりしていただけないだけに、今大会は残念でした。

観戦後のFIFAからのアンケートは日本語で答えられたので、クレームを沢山書きました。(笑)

◆石川さん（ツアー参加者）

日本の第3戦のみを観戦する弾丸ツアーに参加しました。3試合の中では一番攻撃的な試合を観れましたし、岡崎のゴールで会場が静まり返ったときは観に来てよかったと思いました。

◆樋口さん

はちまき作戦（必勝はちまきをスタジアムにいる中立のブラジル人に配り、日本を応援してもらおうとする作戦）用のはちまきを持参し、ブラジルに行きました。これが日刊スポーツで大きく取り上げられたり、ブラジルのワイドショーに取り上げられたりしました。

試合は日本の第3戦とラウンド16のコロンビア対ウルグアイを観戦しました。決勝までチケットを買っていたので、残ったチケットはコロンビア人に高く売って帰りました。

25日ほど現地に滞在していて、世界遺産の島へいたり、クイアバの地元の人と交流したりと楽しかったです。南アフリカも、行く前は怖かったけど、行って好きになりました。今回のブラジルも同じく好きになって帰って来ました。W杯に行くとその国のいい所だけ観て来ているように思います。

(コメント 宇都宮)

南アフリカやブラジルはW杯がないと行かない国だと思います。そういう所へ連れて行ってもらうこともW杯の面白いところだと思います。

◆北田さん（サロン2002新入会員）

ブラジルには中高時代から憧れがあり、今回W杯を観に行くことを新婚旅行の代わりに充てました。

サンパウロでイングランド対ウルグアイ、リオでチリ対スペインを観ました。リオの町中にチリサポーターがいて白煙をたいて騒ぐなど、少し怖かったがとても元気がありました。反対にサンパウロには紳士的な人が多く、カメラをかけていると「気をつけろよ」と声をかけてもらい、親切さと怖さが混ざっているようでした。

サンパウロのスタジアムで妻のカード入れと携帯が盗まれ、スタジアムと駅で紛失届を出していると、同じように取られた人がいたり、手錠をかけられている人がいたり、本当に怖い国だなと思いました。カード入れは当日に見つかり、いやな思いをさせずに帰ってもらおうとするFIFAの配慮があったのかなと思いました。

(コメント 中塚)

私が結婚したのは90年大会の年ですが、新婚旅行の代わりに衛星テレビを購入してW杯を観ることを選択しました。ちょうど開幕戦の日が教育実習の打ち上げと重なり、打ち上げを終えた教育実習生が全員わが家にやって来て、アルゼンチン対カメルーンをTV観戦、めっちゃくちゃになってしまったことを思い出します。いま思えばその中に、現ヨルダン女子代表監督もいましたね。

会場の声Ⅱ 「本日の感想」

◆有坂さん (石神井高校OB/サッカーカフェMF)

W杯期間中は日本にいましたが、大会後のブラジルに、お店の買い付けも兼ねて、サンパウロとリオに1週間ほど滞在しました。皆さんと同じくブラジル人の温かさや、何が起ころかわからない面白さを感じました。

ブラジルの大敗という、サッカーの歴史の中で最も衝撃的な事でしたので、これを受けてこれからのサッカーがどう変わっていくか楽しみです。

◆奥山さん

転職活動を行っていた2010年、2か月ほど南米を旅しました。ブラジルは良くも悪くもフレンドリーな国で、気がつけば危ない目にあいそうになることがよくありました。泊っていた宿に拳銃強盗が入ったことがありましたが、この時私はたまたま危険な夜道をお散歩しながら帰宅したため、はち合わせることになりませんでした。危険と言われる道を通ったから、危険を回避することができました。この経験から、生きているって素晴らしいことで、日本に生まれただけで勝ち組だと感じ、すごくポジティブになれました。

今大会、私も夢をみていましたが、初戦に負けて目が覚めました。新たにアギーレジャパンが指導し、どうやら今までのやり方を踏襲するという判断になったと聞いています。この判断はよかったと思います。

(コメント 宇都宮)

継続性についてはもう少し見て行く必要があるかと思っています。この2試合では全く見えてこないですし、もしかしたらアジア杯で見えて来るかも知れないし、全く見えてこないかもしれません。

◆春日 (筑波大学蹴球部)

電車の中で騒ぐサポーターの話を聞いて、ドルトムントで試合前に遭遇した景色を思い出しました。

私は日本の初戦が終わった後、早々に日本を裏切り、ドイツ代表へ気持ちを切り替えました。毎試合、留学で日本にやってきているドイツ人学生たちと一緒に観戦しました。ブラジル戦では4点目が入ったあたりから、もう点を取らないでくれと大真面目に祈っていました。こういった感覚や思考は日本人にはないと思いますし、このようにならないと日本のサッカー文化は成熟したと言えないのではないかと感じました。

おわりに「アジア杯展望」(宇都宮徹彦)

「連覇の可能性がどれくらいあるか微妙だと思っているが、僕は連覇の可能性を信じたい」

原元技術委員長の話によると、アジア杯の結果についてアギーレにはノルマは設けないと明言していました。結果を求めるあまり、選手選考や采配が消極的になることを避けるためのようです。アジア杯では選手を試して、W杯予選突破を第一に考えるようです。

最大のライバルはオーストラリアになると思います。W杯では玉砕に近い形になってしまいましたが、オランダから得点するなど未来を感じさせるチームでした。自国開催のアジア杯に一つ標準を合わせてくるのではないかと思います。前回大会も決勝で戦った相手ですから、日本はことやるまでは勝ちあがって欲しいと思います。

以上